

船井情報科学振興財団 卒業報告書

Class of 2024

ワシントン大学 Paul G. Allen School of Computer Science & Engineering の Class of 2024 として博士号の取得，そして卒業をしましたので5年間を振り返りつつ最後のご報告させていただきます．夜中に感傷に浸りながら書いているので，くどくどした文章になってはいますがおゆるしてください．

1) 合計6年半にわたる留学生活

私は，スウェーデンのKTHでの修士課程と在学中の半年間のジョージア工科大学訪問研究に加えて，ワシントン大学での博士課程と合計6年半の間留学生活をすることになりました．もともと人と同じメインストリームを歩むことに抵抗を持っており，高校・大学在学中には，カンボジアやインドネシアなどでスタディツアーやボランティアをしたりしていたこともあり，「北米で最先端の研究を！」というようなモチベーションはもともとは高くはなかったようにおもいます．もっといえば，小さい時からわたしにとってのアメリカという国のイメージは，技術の最先端とか憧れの国というようなものではなかったように思いますし，むしろ大学進学してからアメリカという国が，最近はこちらまで研究や社会システムで持て囃されているのか，ということを知って正直戸惑ったくらいでした．

しかしながら，同時に国外で留学することに対しては（親や兄の影響がよくわかりませんが）強い興味を持っており，とくに，ユニークで今まで触れたことのない文化に浸っていくということに対する情熱のようなものは持っていたように思います．

振り返ってみて思うのは，特に20代前半のころの意欲は，「こういうことをやってみたい」「こういうところに行ってみよう」というすんなりとした気持ちだけではなく，未知のものに突き進まざるを得ないような，得体のしれないエネルギーに駆動されていたように思います．しかしながら，今になって，諸外国での様々な情景が当時の感情とともに蘇り，そのときは言語化できていなかったような感覚が形を伴って浮かび上がってくる，というようなことがあると，その時その時エネルギーに突き動かされながらも悩みながら行動をしてきて良かったんだなと思います．

スウェーデンとアメリカは，だいぶ文化や環境が違いました．アメリカでも南部や西海岸で結構違います．最後の報告書として，少しアメリカ社会と日本社会について自分自身が体験して感じたことを書いてみたいと思います．

2) アメリカ社会と日本社会

アメリカという国は日本にいとメディアなどでよく取り上げられることから，いろいろとわかったつもりになっていた部分もありましたが，実際に生活してみると，それも学生という立場で（つまり富裕層など守られたコミュニティ内で生活する者としてではなく）住んでみると，知らなかったことがたくさん見えてきたように思います．それは同時に，日本社会についても自分が生まれ育ったというだけで，おそらく何も見えていないのだなということをも思い知らせてくれますし場所や環境によってだいぶ違うのでしょう．

まず，近年では「多様性」や「国際性」ということが文言の上で叫ばれますが，本当に異質なさまざまな文化や価値観を受け入れなおかつその中でも自身のアイデンティティを保ちながら生活していくということは，当たり前かもしれませんがそれほどすんなりといくようなことではないということです．時には，言語化できないような部分から感情を大きく揺らがされて，そのような環境

との違和を解消するために、結局最終的にはそれまでのあり方を捨てて「アメリカ的」であるものを完全に自分に受け入れ変質していかないと辛くてやっていけないということもあると思います。もっといえば、客観的に社会や価値観を分析し比較しているような状態のままでは実際にはだんだん苦しくなることが多く、（いやむしろ苦しいからこそそのような客観視を取るようになることもあり）その中でだんだんとアメリカ社会（あるいはどのような異文化であっても）の一員としての主観を獲得していかざるを得ないということがあると思います。しかしながら、これは同時にそれまで無意識に培ってきた自分のあり方の一部を手放すことになるわけですから、これ自体が良いことなのか悪いことなのかということを含めても単純なことではなくなります。ですからグローバル化国際化といいながら多様性を真に担保するというのは口では簡単に言えるようなことでも、結局はその場その場の試行錯誤やぶつかり合いの連続を通して、絶妙な緊張関係のもとになりたっていくことなのかもしれません。それは、頭で考えるような分析や解釈から離れた、もっとリアルタイム性のあることだろうと感じます。

アメリカ生活を通して、私が個人的にアメリカ社会に学ぶべき点として感じたことが大きく3点あります。1つはやはり世界中からいろいろな人が集まることにより、文化的背景の異なる人たちが作り上げている社会のあり方です。スウェーデンはじめ北欧ももちろん移民をたくさん受け入れてきていますが、アメリカのそれは、時にラディカルな変化も厭わず常に変化し続けているように感じます。このような「アメリカ的」なあり方は、アメリカ全体でしっかりと機能しているかどうかはわかりませんが、上で述べたように個人によっては苦しさを伴いながら順応していくことを求めるものであると思いますが、それによって大学をはじめとする一部コミュニティにおいては非常に刺激的で日々気づきの連続であり、慣れてくるとそのようなコミュニティでは居心地の良さを感じることができるように思いました。

もう1つは、バイタリティや行動力にあふれた人たちを起点としたダイナミズムです。これまで述べたように、アメリカにおいて「全体最適」のようなあり方を模索するのはなかなか現実的ではないようなことが多く、結局個人が主張を押し合いながら緊張感のもとに成り立っているような面が大いにあるため、思想的なことよりも、それぞれが動き主張し何かを創り出したりしていくというその行為が中心にあるように感じました（これこそがプラグマティズム的思想なのかもしれませんが）。そのために、それぞれが善い社会と思う方向にぐいぐい物事を動かしていき、実際に動いてしまうことが多いと感じます。これも良いか悪いかというよりこのようなダイナミズムは時に私自身おもしろく感じる場合があります。

最後に、自分たちの考えや「よい」と思うこと、こういうものをしっかりと咀嚼し、言葉にして伝えていく、そういう方法論や姿勢が根付いているところでしょうか。日本にはたくさんの「いいな」と感じることや情緒が溢れているように思いますし、何より豊かな自然環境によって醸成されてきたような奥深さが随所にあります。こういったものはたしかに言葉にすればよいというものではないでしょう。しかし逆説的ですが、自分が「いいな」と思えること「おもしろいな」と思えること、こういう感情の動きをしっかりと咀嚼し、あきらめずに言葉にできる限りしながら伝えていき、既存の物事とどう違ってどう似ているのか説明できる、そして共感を得る。その上でそれでも言葉にできないところがあぶり出されていく、それではじめてわかってくることもあるように思います。アメリカ生活の中では多くの小さな違和感を感じる場合がありますが、その違和感こそが自分が無意識に培ってきた独創性の原点であり、これを咀嚼して伝えるということはある程度訓練できたのではないかと思いますし、またまた逆説的ですが、「真に」アメリカ的というのはアメリカの現在のあり方の肯定では必ずしもなく、このように自分の感じ方をあたためて大事にし、それを共有していこうとする態度こそが実はそれなのではないかと思ったりしました。（同時に、「古き良き」アメリカというものにも思いを馳せたりもしました）

ただ、特にパンデミック以降はシアトルのダウンタウンはじめ治安や雰囲気が大幅に悪化したように思います。薬物中毒の人たちやホームレスの人たちはとてもたくさんいますし、公共交通機関などでは、叫んでる人、棍棒を持ってうろうろしている人までいたりして、いわゆる超富裕層地域以外では気が完全に休まる場所はないように思いました。銃事件も日常茶飯事です。一度勤務で住んでいたサンフランシスコ周辺もどんどん街が劣化しているように思いました。一方では、現在テック企業のAI研究職は年収でいうと5、6000万円を超えることも多く、あまりにも歪な社会であり、一度真剣に一人ひとりのことや社会のことを考え始めると自分の思考の処理能力を簡単に破綻させてしまうほどに意味の不明な状況になっています。たとえば日本でも相対的貧困や子供の貧困などの問題は増えていながらも、これを問題としてしっかり認識することは少なくともできますし、お互いの生活に思いを馳せることや思いやること、そして、ちゃんと皆と一緒に考えればなんとか社会の軌道修正ができるのではないかという希望もまだ持てると思っっているのですが、アメリカにおいては全くそのような感覚にすらなれないほどにあまりにも理解不能な物事が多いように感じました。これは私が留学生だったからということだけではないようで、アメリカにおいてこの階級的な差は（建国の精神に反するような形で）相当に広がり、そこに想像力をはたらかせる余地をもたせづらい状況に感じました。

とは言いながら、これが日本だったらどうしようもないような気もするのですが、アメリカという国ではそのような状況になってもきっと誰かなにかがでてきて状況が一転したり持ち直したり、そういう想像以上のダイナミズムがあると思えるところも含めて、なかなか特異的だと感じました。そのような場で生活を送る上で、次に書きますように（特に日本の）エンタメのちからは相当に大きなものでした。

3) エンタメ

アメリカ滞在中には、日本語に飢えることが多く、小説などは一時帰国などで大量に買い込みよく読んでいました。また、友人にすすめられてから日本のアニメ等も見ようになりました。パンデミック中はじめ、Ph.D.課程の間とても辛いことも多く、何度か本気で、辞めて日本に帰ろうか、日本でそうしたら論文博士を取ろうかなど考えたことがありました。その中で、家族や友人などの励ましに加えて、日本のエンタメには非常に助けられてきたように思います。涙活をしたことも幾度も…本当にストレスで参っている時にはちょっとした表現でも泣けてきます。こういう優しい感性、もしくは繊細な感性によって紡がれてきた日本のサブカルや文化はきっといろんな場面で様々な人々を勇気づけてきているのだらうと痛感し、感動したのを覚えています。

研究というものも、やり方次第では自然界を交えた自己表現の場として行っていくことはできるでしょうし、世の潮流とは違う場所で、日の当たらない場所で、ものすごい着眼点と執念と反骨心そしてとても繊細な心で続けられている研究に触れると、心ふるえることもあります。しかし、アメリカの機械学習の一部コミュニティでは、場合によってはそのような気持ちになりづらい雰囲気があったり、基礎理論研究分野でも時にはとても「左脳的」な事柄のみに支配されているような、私にとっては閉塞感を覚えることが増えてきました。たしかに、アメリカはいろいろな文化や価値観で溢れていると思いますが、局所的に見ると、同質の価値観が強大化しすぎているようなこともあり、おそらく日本でよく言われるようなこととは違う意味における息苦しさというものは多分にあるのではないかと感じました。

そのような中で、小説を始め（日本の）エンタメはなんて情緒に溢れているのだろうか、なんて自由なのだろうか、きっとそのように思ったのだと思います。どのようにうごめく感情であっても、体験であっても、これらの形で昇華されたものは、内容に関わらずそこにある種の「優しさ」も感じさせてくれて、その意味で根本的に「肯定」に満ちあふれているのではないかと感じました。

「自分もこうやって誰かの心を芯からふるわせるような、励ますようなそういう創作がしたい」、そう感じさせてくれました。

このようなことは、研究でも教育でもどのような形でも創り出せることだと思っています。これからも、どのようなことであれ自らの心がふるえ、踊るような生き方ができたら幸せだと思いました。

4) 卒業式

ディフェンスが終わってから卒業式までは非日常でとても濃度の高い日々になりました。一緒に過ごしてきた友人のディフェンスにも参加したり、ガウンを注文するなどしました。関係者には卒業のご報告をしたりして、卒業式前後は大学（学科）がイベントを企画してくれているので、多くの人たちがキャンパスに集います。後輩たちや友人たちと一緒に写真を撮ったり、飲みに行ったり、なにより開放された喜びでとても楽しい期間でした。

ちなみに <https://www.youtube.com/watch?v=RbMRVzz5jRY>

こちらの26:20あたりから私の Hooding です。指導教員はあいにくシアトルに来られなかったので学部長の方が Hooding をやってくれました。ワシントン大学はアドバイザーチームもみなすごくあたたかく、サポートに熱心で、アドバイザーチームに限っては世界一ではないかと思います。同僚も過去辛いことがあった人たちが少なくないですが、アドバイザーチームに救われた人たちは多かったようです。

我々同期は入学してすぐにコロナになってしまい大変だったと思います。就職先も決まり、みんなで最後の大学の時間を満喫しました。両親も急遽卒業式に来てくれ、この晴れの舞台を共にすることができて本当に良かったです。前にも書きましたが、これほどまでに達成感に満ち溢れ、喜びに満たされて、それは同時にいかにそれまで追い詰められていたかということでもあるのですが、このような時間を過ごせたことが幸せです。

同期の何人かは同時卒業で就職先も決まり、今後はそれぞれの道に進んでいきますが、これからもいろいろな形で協力できたら良いなと思いますし、学位取得の苦楽を共にした同僚がアメリカ中心に世界にいるというのはこれからの人生においても大きな財産になるでしょう。

5) これから

8月1日に、愛媛大学大学院理工学研究科数理科学講座准教授に着任しました。松山の街は、共同研究で何度か来ており、とてもいい街だと感じていました。自然も豊かですし、同時にコンパクトに街の機能が集まっており、路面電車なども街に趣を与え、なにより正岡子規等文学の街でもあります。パンデミック前後に来ていたことが多く、この街には当時の辛かったときの記憶も紐付いてしまっているようで、松山空港に来るといまでも少し不思議な気持ちにさせられます。

昨年の段階で、将来の進む道についてさまざまな選択肢に一通り考えをめぐらしておりましたが、公募時期も早く、挑戦してみてダメならばアメリカに残ろうと考えていたところ、非常に魅力的なポジションをいただけましたので、帰国することになりました。

アメリカ的な価値観や方法とは必ずしも同じではない、コミュニティ、研究創造、そういうメタ的に創造性に溢れたあり方というものを探りながら、「瀬戸内 AI 構想」として試行錯誤していきたいと思っています。アメリカ的なものを志向するならばアメリカにとどまればいいわけですし、その土俵だけでいくならばどこまでいっても亜流であり続けられない気はしますが、上で述べたように自らが良いと思える環境をあきらめず見つけ出し、その「よさ」を自分自身でしっかり咀嚼して理解し、その上でだからこそ創れることを考え実行していけばとても幸せなことだと思います。同時に、それを形にしていく、「よさ」を言語化していく、そういうところについてはアメリカで学んだ方法論は役に立つのではないかと思います。

松山（日本）を次世代AIの聖地にできるよう基礎研究だけではなく地元の企業等との連携や教育なども頑張っていきたいです。着任までも講座の人たちにはとても（本当に本当に）お世話になりました。大学や地域に貢献できますように頑張っています。そして、きっと日本とアメリカの関係と地方都市と大都市圏の关系到さまざまに共通点があるのではないかと最近思ったりもしています。

（雑感）この5年間、いろいろなことがあった。ふと蘇る日常の一場面、ああこれもアメリカ生活の一部か、そう思ってみて、短いようで実にいろいろなことがあったと思う。（だけれど、郷愁漂う異国の景色がふと浮かんだとき、また友達といろいろなところに遊びに行ったときの記憶、それが実はアメリカより前の北欧生活のひとつだった、ということもある。自分にとって北欧からのアメリカの生活は大きな変化ではありつつも地続きであった。）異国での20代での生活は、月次の言葉になってしまうけれど、すごく成長した、振り返ってそうはっきりと感ずることができる時間だった。成長、と感ずるのは、何か伸びたり何か積み上がったりした実感からではなくて、いろいろなことが自分の中で刷新され新たにされた気がする、もはやその前後で連続性がないようにすら見えながらも、しっかりと自分の足で一歩々々その時間その時間を歩んだ実感があるというそんなところからの気持ちだ。

卒業が決まってからは、いままで感ずたことのない達成感を覚えた、こんな気持ちになれるものか自分でもびっくりしたくらいに。辛かったことなどもふっとんで、これですべて良かった、と全部肯定できる気持ちになった。その気持ちがいまもずっと続いている。

自分自身に与えられた役割を覚え、これからも平和の道具として世の中のために用いてもらえるように、今なにができるだろうか、そういうことを自問自答しつつ、創造的な人生を歩んでいきたい、そう思います。そして、教育にも携わる上で、ひとりひとりが「肯定」され、その上でそれぞれの感性が活かせる道筋の助けになれる現実的なリソースでもありたいと思っています。

いろんな価値観や感じ方、自分にはないそういうものを取り込みながら環境を大きく変えながら生活することは、時としてとても痛みを伴うことではあると思いますが、自分の足で一歩々々歩き、自分の目でその情景を見ていく、それだけのことがどれだけおもしろいことであるか、それを思い知らせてくれた留学生活でした。

（さいごに）船井情報科学振興財団様には、留学前からずっとお世話になりっぱなしでした。特に事務局の斉藤さんと近藤さんには本当にお世話になりました。また、資金面はもちろん、交流会などによる財団生のつながりの場を提供くださり、心から感謝申し上げます。私の場合指導教員が途中で他大学等に移ってしまったこともあり、現実的に財団のご支援は大きな助けになりました。これから、財団生とも協力しながら、日本の発展とその価値観の世界における確立と寄与に大きな貢献ができるように試行錯誤を続けながら頑張っていきたいと思っています。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。